

# 夢中・熱中，体育学習

～ 学習内容を習得・活用する授業づくり～

## はじめに

昨年度は「夢中・熱中，体育学習 ～学習内容の系統性を踏まえた授業づくり～」のテーマの基，子どもたちが「夢中・熱中」して体育学習に取り組むことができる授業をめざして研究に取り組んだ。「夢中・熱中」できる授業を実現させるためにも，「学習内容の妥当性」「教材化の効果の検証」「支援の在り方」の3つについて，形成的授業評価や授業分析等を用いて検証を行ってきた。その研究の成果は，第46回中・四国小学校体育研究大会（香川大会）において，会場校の実践並びに各都市の提案により，中・四国の多くの参会者の先生方に発信することができた実りの多い1年であった。

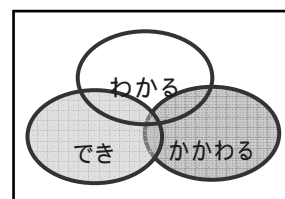
## 1 研究テーマ設定の背景

### (1) 新しい学習指導要領から

新しい学習指導要領改訂の基本方針となった「中教審答申」では，体育の課題として「運動への関心や自ら運動する意欲，各種の運動の楽しさや喜び，その基礎となる運動の技能や知識など，生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成が十分に図られていない例も見られる」と指摘している。支援という名の下，楽しさだけを追求させることに大きな関心が向けられ，教師の指導性については，関心が向けられてこなかった傾向があるのではないかとされている。

また，新しく改訂された学習指導要領では「発達段階を踏まえて指導内容の明確化を図る」「運動の系統性を図る」「保健における指導内容の改正」「健康に関する内容の明確化」「知識を身に付ける」ことが中心となって改訂が行われた。そしてこれらの力を確かなものにするために，「習得，活用，探求」の学習のサイクルも示された。これらのことから，教育のプロとして，授業力の向上をめざすことが大切とされている。

では本県のこれまでの研究と，新しい学習指導要領とはどのように整合するのであろうか。まず，「発達段階を踏まえて指導内容の明確化を図る」「運動の系統性を図る」ことについては，これまでも学習内容を「わかる・できる・かかわる」と設定し，それらがともに重なり合うことで楽しさにつながることであり，研究を進めてきた。このことは新しい学習指導要領の趣旨を踏まえていると捉えることができる。



また「発達段階を踏まえて指導内容の明確化を図る」においては，全学年・全領域における学習内容の系統表を作成するだけでなく，作成した学習内容の系統を実際の授業実践を通して検証を行ってきた。

### (2) これまでの研究から

研究を進めることで，概ね以下のような成果が得られた。

系統性は短い期間の研究で検証できるのではなく，修正を加えながら研究を進めていくことが大切であると考え，長期的な展望にたち研究を進めることができた。

系統性をテーマに進めることで，子どもの学びの道筋を捉えることができ，系統表を基に，単元計画

のモデル，教材分析表，場の工夫，基礎感覚づくりや技につながる動き，効果的な指導や補助など授業づくりにつながる形で研究を進め，形としてまとめることができた。

形成的授業評価を活用し授業改善を行うことで，児童の意識に沿った学習が展開でき，教師の関わりを見直すことができた。教師の支援の在り方を考えることができるようになった。

この成果については今後も継続していきたい。

その反面，いくつかの課題も生まれた。

**系統性を授業でどのように意識していくか，明らかになっていない内容や単元がある。**

**系統表だけでは体育を専門としない先生にとって授業づくりは難しい。**

**新しい指導要領では「指導」が重視されている。支援の在り方でよいのか。**

これらのことについて，なぜこのような課題が生まれたか，振り返ってみたい。

まず1つ目の課題である。系統表はあくまでも目標レベルであって，目標を設定しただけで授業が大きく変わるわけではない。授業を変えるためには，教材開発や教材分析等の授業研究が大切である。しかしながら，このような意見が出されたのは，系統表よりも授業づくりに課題があったと考えられる。6年間で「何を」「いつ」「どのように」学ばせることは明らかにすることができたが，単元や1単位時間において「何を」「いつ」「どのように」学ばせていくかまで踏み込んで研究を深めるまでは至らなかった。このことは課題の2つ目とも関連しており，一般化をねらって系統表を作成したものの，目標レベルに留まってしまったことは否めない。

3つ目の課題である。本県では支援の中でも「具体的な言葉かけ」に視点をあて，子どもたちが授業を通して，学習内容を確実に習得させるための具体的な教授行為を「夢中・熱中させるための支援」と捉えてきた。これまでの支援より，一步踏み込んだものであることは説明してきた。しかし，新しい学習指導要領では教育のプロとして指導力が求められるのも確かである。「これまでの単なる支援ではない」と言うことを，説明しても，今後も同様の意見は出されるであろう。教育のプロとして教えるべき内容はしっかり教えるというスタンスを大切にするためにも，「支援から指導へ」の変更が必要と考える。

### (3) 平成21年度研究のテーマ

これまでの研究の成果からも，「学習内容の系統性を明らかにすること」「学習内容を身に付けさせるために教材化をはかること」「それらを踏まえた授業づくりを行うこと」はこれからの体育学習にも望まれていることである。つまり，子どもが授業に夢中・熱中になって体育学習に取り組み「わかる」「できる」「かかわる」という学習内容を，しっかりと習得・活用させることが大切であることは，今後とも継続していく。

しかしながら課題でも挙げられたように，単元や1単位時間において「何を・いつ・どのように学ばせていくか」，つまり「学習内容を単元や1単位時間の中で習得し，活用させていくためには，どのような教材や教師の働きかけが必要か」と言ったことは明らかにしていく必要がある。そのことが，系統表を授業づくりに生かすことや，体育を専門にしない先生方に広めることにもつながるかもしれない。

そこでテーマを，

「夢中・熱中，体育学習 ～学習内容を習得・活用する授業づくり～」

と設定し，単元において学習内容を確実に習得し，活用させる道筋を明らかにすること，そのために必要な教師の指導の在り方を明確にすることを研究していきたい。このことにより，「夢中・熱中できる体育学習」が，全県下に広がることを期待している。

## 2 今年度の研究の視点

これまでの研究や、香川大学米村耕平先生のご指導から、夢中・熱中できる授業の条件として、次の4つのことが大切であると考えてきた。

学習目標がはっきりとしている授業  
学習方法の形式が多様な授業

教材や場作りの工夫が見られる授業  
教師の指導性が明確な授業

授業の中でこれらのことを具現化していくことが必要である。今年度はその具現化していくための様々な手だてや方略を明らかにし、学習内容を確実に習得・活用させることで「夢中・熱中できるための授業づくり」を提案していきたい。

### (1) 習得させる学習内容の明確化

このことについては、これまでも研究してきた内容である。今更、研究の視点にする必要がないのでは、と言う声もあろう。しかし、習得させる内容自体が不明確のままでは、夢中・熱中する授業には至らない。また、学習内容を設定しても、それがそのまま子どもの腑に落ちることはなく、いくつかのカテゴリーやレベルが存在し、それらを習得し活用していくことで確かな学習内容が確実に身に付くことにつながる。

例えばリレーの授業で考えてみたい。リレーで大切な学習内容は「テークオーバーゾーンの中で、減速の少ないバトンパスをする」ことである。そのためには、「バトンの受け渡し方」「コーナートップなどの知識」「走る順番」「走り出しのタイミング」などの内容を習得させる必要がある。それらの習得した内容を他の教材の場で活用させることで、互いがスピードに乗った状態でバトンのパスが行えれば、バトンのスピードが落ちずにつながっていくと言った確かな学習内容を身に付けることができる。

単元において習得させる内容は何か。各領域、学年ごとに何を学ばせなければいけないのか、さらに明らかにしていきたい。

### (2) 習得・活用させるための教材化

次に、習得・活用させるための有効な教材を探っていく。

子どもたちが学習内容を習得したり活用したりするのは、あくまで教材を介してである。そのためにはこれまでの教材化の視点に「習得させるための教材」「活用させるための教材」と、明確な目的をもってその教材化を行っていく必要がある。例えばバスケットボールの授業では、単元の前半において、ボールの操作技能を習得させるためのドリルゲームや、ボールを持たない者の動きを習得させるためのタスクゲームなど、学習内容の習得を中心とした下位教材の設定が考えられる。また、単元が進むにつれ、これまで習得してきた内容を活用する場として「3 on 3」などの主教材が設定され、下位教材で習得した内容を主教材において活用し、確かな学習内容を身に付けることが考えられる。

これまでの教材化の視点を生かしつつ、(1)で明らかになった内容を確実に習得させたり、活用させたりするための教材化の道筋を明らかにしていきたい。

### (3) 指導の在り方

学習内容を習得・活用させていくには、どのような指導が必要なのか探っていく。

体育の授業において、よい授業の基礎的条件としては次の4つがある。

学習従事時間が確保されている

学習規律が確立している

教師の肯定的な関わりが見られる

学習者の情緒的解放や肯定的な関わりが見られる

これらの条件をクリアするためにも、1単位時間の授業に留まらず、単元を通してどのよ

うに授業を構成していけばよいのかを明らかにしていきたい。

単元の中では、発問、説明、指示といった教師が主導となる場面と、自分のこだわりをもたせ、自分なりに追求・探求させて子ども達同士で話し合うといった子ども主体となる場面がある。それらの場面を単元の中でどう取り入れていくかが大切である。そのための、教師の指導の在り方を明確にしていきたい。

### 3 研究の方法

#### (1) 学習内容を習得・活用できたかどうか子どもの様相から探る

授業においての子どもの「動き」はもちろんのこと、子どもから出された「言葉」からも、学習内容を習得・活用することができたかどうか探っていく。

「動き」から探っていくことは、これまでも行われてきたことである。では「言葉」である。子どもたちは授業において、友だちの動きを見てアドバイスを送ったり、チームで作戦を考えたりする際に「言葉」を用いる。「言葉」は授業中に話すものもあれば、ワークシート等に書くものもある。教師は「言葉」として表出されることで、子どもが学習内容を理解できているかどうかを捉えることができる。これまでのように「動き」だけではなく、子どもの「言葉」からも、学習内容を習得・活用できたかどうか探っていく。そのためには、学んだことや、感じたことが表出できるワークシート等をあらかじめ準備し、記録として残していく。また可能な限り、授業の中での子どもの反応を拾い上げ、記録として残していくこととする。それらの「言葉」を手がかりに、学習内容を習得・活用することができたかどうか探っていく。

#### (2) 教材化・指導の在り方を単元レベルでまとめる

これまで、単元全体を通しての授業の展開や指導の在り方を「授業づくり活用表」としてまとめることを提案してきたが、その意図について共通理解を図ることができないままである。そこで、研究をまとめる際には、単元を通して「明確にした学習内容」「習得させるための教材」「活用させるための教材」「具体的な指導方法」「子どもの様相」などをまとめ、一つの単元の大まかな展開がつかむことができるようなものを作成する。

イメージとしては平成 18 年度に紀要でまとめた教材化に、下位教材や指導の在り方を追加していくようなものと考えている。

3 教材化

教材について	
<p><b>【ボール投げゲーム】</b> 仲間とボールを投げる。捕るを繰り返しながら、ボールを的に投げつけるゲーム。 【ねらい】... 足の踏み出し、手や腕の動き、目の付けどころなどを覚える。投げたボールの軌道や速さを観察し、ボールを的に投げつけることができるようになる。</p>	<p><b>【フリーゲーム】</b> ボールをパスでつなぐ。ラリーを続けることを大団円にしたゲーム。ゲームの発展だけでなく、チームワークの必要に気づかせる。 【ねらい】... ラリーの楽しさを味わい、チームワークの必要に気づかせる。</p>
<p><b>【ソフトバレーボール】</b> 高いボールを打つこととわかる。ボールの落下地点に入るようにわかる。低いボールを打つこととわかる。ボールの落下地点に入るようにわかる。 【ねらい】... 高いボールを打つこととわかる。ボールの落下地点に入るようにわかる。低いボールを打つこととわかる。ボールの落下地点に入るようにわかる。</p>	<p><b>【ソフトバレーボール】</b> チームで協力して三段攻撃で、アタックを決めることをおぼたゲーム。三段攻撃に重点を置いたゲームを習熟させるために、毎週数は3～5回に限定する。キャッチスを採用することで、どの子にもアタックを打って決まった時の喜びを感じさせることができる。どこにボールをパスすれば三段攻撃が成功するか判断しやすくなる。落ち替えて考える事ができたことで、子どもたちは、アタックを決めるためのフォーメーションや役割分担を考えるようになる。 【ねらい】... チームで協力して三段攻撃で、アタックを決めることをおぼたゲーム。三段攻撃に重点を置いたゲームを習熟させるために、毎週数は3～5回に限定する。キャッチスを採用することで、どの子にもアタックを打って決まった時の喜びを感じさせることができる。どこにボールをパスすれば三段攻撃が成功するか判断しやすくなる。落ち替えて考える事ができたことで、子どもたちは、アタックを決めるためのフォーメーションや役割分担を考えるようになる。</p>
<p><b>【ソフトバレーボール】</b> チームで協力して三段攻撃で、アタックを決めることをおぼたゲーム。三段攻撃に重点を置いたゲームを習熟させるために、毎週数は3～5回に限定する。キャッチスを採用することで、どの子にもアタックを打って決まった時の喜びを感じさせることができる。どこにボールをパスすれば三段攻撃が成功するか判断しやすくなる。落ち替えて考える事ができたことで、子どもたちは、アタックを決めるためのフォーメーションや役割分担を考えるようになる。 【ねらい】... チームで協力して三段攻撃で、アタックを決めることをおぼたゲーム。三段攻撃に重点を置いたゲームを習熟させるために、毎週数は3～5回に限定する。キャッチスを採用することで、どの子にもアタックを打って決まった時の喜びを感じさせることができる。どこにボールをパスすれば三段攻撃が成功するか判断しやすくなる。落ち替えて考える事ができたことで、子どもたちは、アタックを決めるためのフォーメーションや役割分担を考えるようになる。</p>	<p><b>【ソフトバレーボール】</b> チームで協力して三段攻撃で、アタックを決めることをおぼたゲーム。三段攻撃に重点を置いたゲームを習熟させるために、毎週数は3～5回に限定する。キャッチスを採用することで、どの子にもアタックを打って決まった時の喜びを感じさせることができる。どこにボールをパスすれば三段攻撃が成功するか判断しやすくなる。落ち替えて考える事ができたことで、子どもたちは、アタックを決めるためのフォーメーションや役割分担を考えるようになる。 【ねらい】... チームで協力して三段攻撃で、アタックを決めることをおぼたゲーム。三段攻撃に重点を置いたゲームを習熟させるために、毎週数は3～5回に限定する。キャッチスを採用することで、どの子にもアタックを打って決まった時の喜びを感じさせることができる。どこにボールをパスすれば三段攻撃が成功するか判断しやすくなる。落ち替えて考える事ができたことで、子どもたちは、アタックを決めるためのフォーメーションや役割分担を考えるようになる。</p>

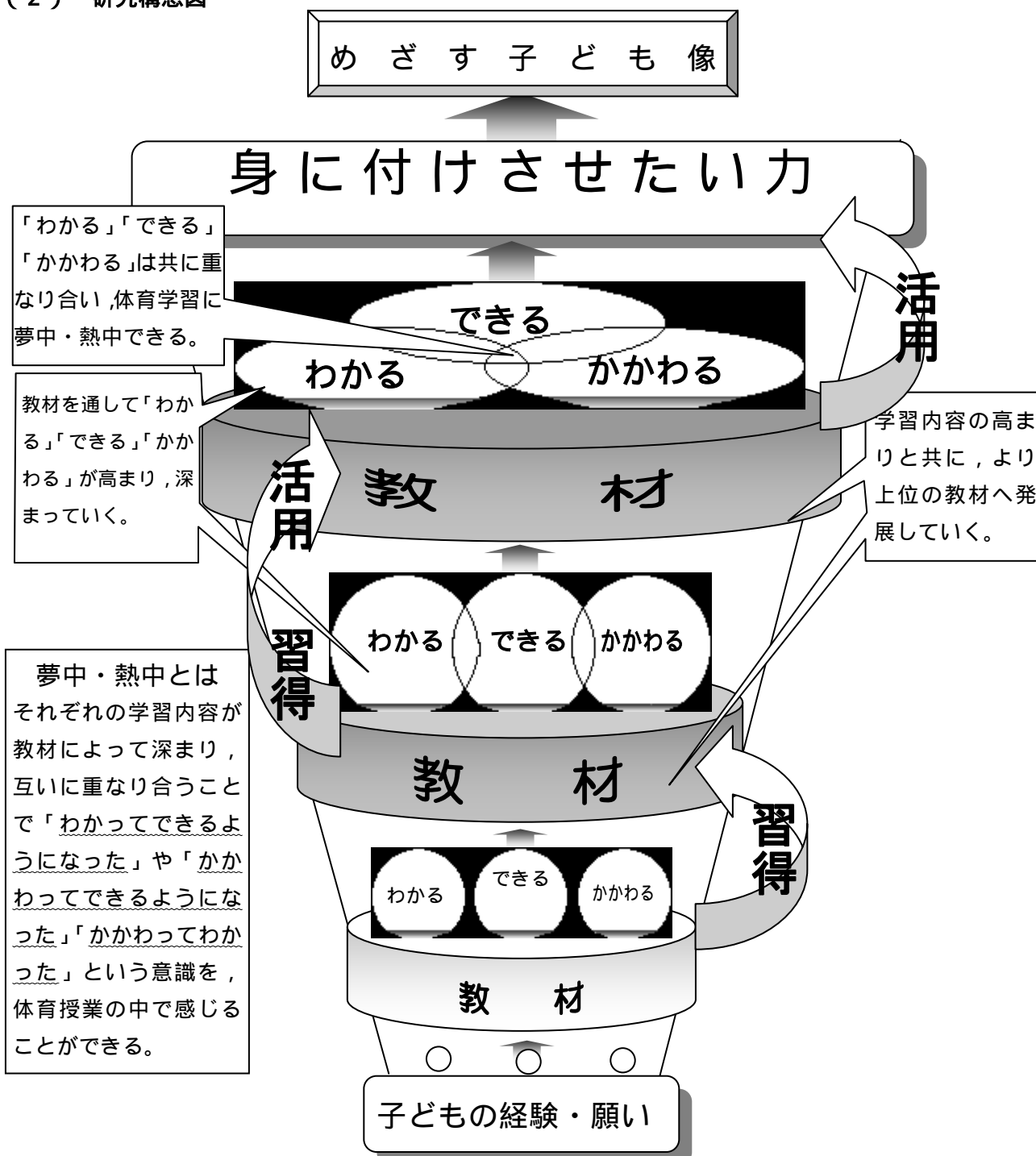
この表に「学習内容」や「下位教材」、「指導の在り方」等を書き加えていく。

#### 4 研究の構想

##### (1) めざす子ども像

生涯にわたって運動やスポーツに親しむのに必要な資質と健康・安全に生きていくのに必要な身体能力，知識を身に付けた子ども

##### (2) 研究構想図



「わかる」「できる」「かかわる」は共に重なり合い、体育学習に夢中・熱中できる。

教材を通して「わかる」「できる」「かかわる」が高まり、深まっていく。

学習内容の高まりと共に、より上位の教材へ発展していく。

夢中・熱中とはそれぞれの学習内容が教材によって深まり、互いに重なり合うことで「わかってできるようになった」や「かかわってできるようになった」「かかわってわかった」という意識を、体育授業の中で感じることができる。

**わかる**  
言葉やイメージでよい動きのコツがわかる。健康・安全な生活の仕方がわかる。

**できる**  
運動の特性にふれるために必要な技能を身に付けている。

**かかわる**  
ルールやマナーを守るとともに、友達と教え合い、高め合おうとする。健康・安全な生活に関心をもつとともに、友達と教え合い、高め合おうとする。